

学位論文の要旨

保健学専攻	生涯保健学分野 成人保健学領域	氏名	田中 佐千恵
<p>題目</p> <p>Effects of Early-Stage Group Psychoeducation Programme for Patients with Depression (うつ病患者に対する早期集団心理教育プログラムの効果)</p>			
<p>要旨</p> <p>【背景】 うつ病は増加が指摘されている精神疾患で、WHOは世界的に350万人以上の人々がうつ病に苦しんでいるとしている。日本でもうつ病患者は増加傾向にあり、厚生労働省の患者調査(2011年)では、12年前の1999年と比較し約2.2倍増加している。 また、うつ病は再発しやすい疾患とされ、再発を予防する心理社会的治療として心理教育(psychoeducation)が注目されている。心理教育の効果については、薬物アドヒアランスの向上、うつ症状の軽減、長期予後に好影響を及ぼすことなどが報告されている。しかし、これらの報告は、地域在住の患者を対象に個別に実施した心理教育の効果を検討したもので、入院中の患者を対象に集団実施した心理教育の報告はない。そこで本研究では、入院早期のうつ病患者を対象に集団心理教育プログラム(Group Psychoeducation Programme: GPP)を実施し、その効果について検討することを目的とした。本研究は信州大学医倫理審査会の承認を得た。</p> <p>【方法】 2010年4月から2012年4月の間に信州大学医学部附属病院精神科に入院し、うつ病エピソードと診断された患者147名のうち、研究への参加に同意の得られた82名(男性22、女性60、平均56.1±15.6歳、23-88歳、中央値63歳)を対象とした。参加者は入院後に薬物療法、精神療法(CBTを含む)、作業療法およびm-ECTのいずれかを組み合わせた治療を通常治療として受けていた。これらの通常治療に加えて、GPPに参加した者を「参加群」、参加しなかった者を「対照群」とし、両群の属性、SMSF(気分と疲労のチェックリスト)、半年後の再入院率、GPPに対する参加者の感想と精神保健福祉相談の件数を調査した。なお、GPPは計3セッションのプログラムとし、3回のセッション内容はガイドライン(Katon et al; 1995)を参考に構成した。</p> <p>【結果】 参加群は45名(男性16名、女性29名、平均53.1±15.4歳)、入院期間は88.2±42.5日、m-ECTの実施者は7名であった。参加群は入院後44.3±31.5日目にGPPに参加し、参加回数は2.2±0.8回(1回~3回)であった。対照群は37名(男性6名、女性31名、平均58.9±16.0歳)で、入院期間は77.7±48.6日、m-ECT実施者は14名であった。両群ともに女性が多い傾向にあり、参加群は対照群より年齢が6歳ほど低く、入院期間が10日ほど長かったが、有意差を認めるほどではなかった。対照群ではm-ECT実施者が有意に多かった(p=.02)。 SMSF(13項目)では、両群ともに退院時には顕著なスコア変化(症状改善)がみられた。「回復感」のスコア変化は対照群で有意に大きかったが(ANCOVA, p=.03)、他の項目では両群間で</p>			

スコア変化に有意差はなかった。参加群の SMSF スコアを入院時、GPP 開始時、退院時で比較すると、「緊張/不安」「抑うつ/自信喪失」「あせり」「頭/思考疲れ」「体調」「退屈感」「回復感」で有意なスコア変化（改善）が認められた（ANOVA, $p = .01 \sim .000$ ）。スコア変化は GPP 開始時と比較し退院時で大きく、「抑うつ/自信喪失」（ $p = .007$ ）、「あせり」（ $p = .009$ ）、「頭/思考疲れ」（ $p = .000$ ）、「意欲/活力」（ $p = .013$ ）では有意差がみられた。多重比較（Bonferroni）の効果量（ d ）は入院時と GPP 開始時の比較（ $d = .01 \sim .35$ ）より、GPP 開始時と退院時の比較で大きかった（ $d = .24 \sim .70$ ）。

参加群の感想は、GPP によって「病気や薬・今後の生活の仕方に対する理解が深まった（36名）」、「今後への肯定的な気持ちが持てた（20名）」、「不安を共有でき一人じゃないと思えた（15名）」、「話すことで発散できた（12名）」など、ポジティブなものが多かった。また、GPP 参加前に医療福祉相談を受けていた患者は8名であったが、GPP 参加後には新たに13名が医療福祉相談を希望した。

退院後6ヵ月以内に再入院した者は、参加群が4名（8.8%）、対照群が6名（16.2%）であった。再入院に影響する要因を検討するために、再入院を目的変数、年齢、入院期間、診断名、GPP 参加、服薬量を説明変数とするロジスティック回帰分析を行った。その結果、診断名の「重症うつ病エピソード」が再入院に影響する因子として検出された。

【考察】

対照群には m-ECT の実施者が多く、重症例が多く含まれていた可能性があり、これらが GPP 参加に至らない要因として作用した可能性がある。参加群では GPP 開始後の SMSF スコアの変化が大きく、GPP は「緊張/不安」、「抑うつ/自信喪失」などの気分を安定化させる集団精神療法的な効果があり、GPP によって他職種連携が促進されることが確認された。入院早期のうつ病患者を対象とする GPP の有効性が示された。

研究指導教員 信州大学学術研究院（保健学系）教授 小林 正義